NPO 法人　教育支援グループ　Ed.ベンチャー　広報誌　2025/9/26 発行　No.70

Ed.ベンだより

〒242-0007　大和市中央林間 3-16-12 グリーンコーポ中央林間 107
電話／Fax 046-272-8980　Email: toiawase@edventure.jp　URL https://edventure.jp/

「平和」のゆくえ

今回の Ed,ベンだよりは私ごとの内容が多くなってしまうことを、お許しください。

今年の 8 月にパートナーとともに、夏休みを利用して、ベトナムの青年の案内でポーランドとドイツを回りました。約 2 週間の旅程でした。

ポーランドのワルシャワを起点として、同じくポーランドのクラフク、そして国境を越えてドイツ・ベルリン、ニュルンベルグ、ミュンヘンと訪れました。旅の目的は、ワルシャワのゲットーやワルシャワ蜂起をたどること、そしてクラクフの強制収容所、シンドラーの工場、アウシュビッツの強制収容所などをこの目で確かめ、その後ドイツにわたり、ナチス・ヒットラーの足跡を遡っていくことでした。なぜ今この旅だったのか、ということについては二つの理由がありました。一つ目はただ単純に、ガイドの英語による説明を、英語がわからない私に今回のコーディネート役のベトナム青年が通訳してくれたということです。そして二つ目は、これは後にも触れますが、現在の世界的な状況がロシア→ウクライナやイスラエル→ガザだけでなく、もちろん日本も含めて「戦争容認」のムードが強く、「平和」の理念が曖昧になっているように感じているからです。AI の技術や生産力の向上などで世界がどんどん「狭く」なる中で、自国の利益追求といった姿勢がますます強くなり、一方では持てる国と持たざる国との差はますます広がりつつあります。こうした今だからこそ、アウシュビッツやナチスのことを、しっかりと確かめたいという思いがありました。

この旅のいくつかの感想から考えたことを述べます。

一つ目は、こうした負の歴史にまつわるかたいテーマの旅に関わらず、常に多くの国の人々が一緒に、それぞれの場所でガイドの説明に耳を傾けていたことです。それだけこの負の歴史を直視することが当たり前のように受け止められているのだと思いました（日本の人に会えなかったのは残念でした）。

二つ目は、自分でも本当に不思議に今でも思うのですが、ワルシャワのゲットーの壁を見たとき、以前にも来たことがあるような既視感に囚われました。アウシュビッツの展示でも同じことが起きました。以前何かの折に写真で見ていたからなのかもしれませんが、それらが自分に向かって肉体的なレベルで、何かを伝えてきているようにも思えました。

三つ目は、被害、加害の歴史的事実をしっかり継承しようとする姿勢です。ポーランドにおける「被害の歴史」はまだうなずけるのですが、ドイツにおいて「加害の歴史」を残そうとしてきた姿勢には本当にびっくりしました。そして、そうした動きがどのようにして始まったのかを聞いて、なおさら驚きました。

実は、戦争が終わりドイツ兵も夫や父として家庭に戻ったわけですが、彼らは何も語らず、ただ夜中にうなされたりすることが多かったそうです。「加害者」としての心の傷を多くの男たちが深く抱えていたことは、想像に難くありません。こうした夫や父の姿を見て、過去の事実を事実として直視しなければいけない、という運動を起こしたのは元兵士たちの妻や子どもたちだったそうです。ですからこうした運動がおこり、現在でも見ることができる多くの歴史的遺産が整理されたのは、戦後 10 年を経てからだそうです。父親世代の失敗の総括を、妻や子どもたちが先頭に立って取り組んだのです。

こうしたドイツの人々の「総括」のような取り組みは、日本ではあまり見られません。そういえば、日本の戦後処理の仕方は、どこか中途半端さを感じます。日本の戦後処理は、ドイツの戦後処理と比較して語られることが多いと言われています。単純にネットで調べても出てきます。以下は AI による解答です。

ドイツと日本の戦後処理の最も大きな違いは、国家の存続の仕方と賠償・補償の対象と範囲にあります。ドイツは「分割占領」を経て国家が一時消滅した一方で、日本は「米国による単独占領」で国家体制が維持されました。賠償に関して、ドイツはナチス犯罪の被害者への補償を個別かつ包括的に行い、日本は戦後の冷戦構造の中で対日賠償請求権を放棄した国が多く、国家間の賠償は一部の国に限定されました。

ドイツは戦後二つの国に分けられ、「自分たちのドイツ」を獲得するために、統一に向けて様々な葛藤を乗り越えてきました。背負わされた賠償まで含め、まさしくマイナスからの出発だったわけです。それに比べると日本は、アメリカの進駐という戦後体制の中で、天皇制はもちろん

日本国の形を維持したまま戦後を迎え、賠償請求も強くはされてきませんでした。国家間の賠償の話ももちろんですが、日本においては、私たち国民一人一人があの太平洋戦争について、何を思い、どのように整理してきたのでしょうか。そこにはやはり疑問が残ります。
　ここで私の父親の話になり恐縮ですが、少し引き合いにだしてみたいと思います。父親は 1918（大正７）年の生まれです。戦争当時は 20 代を生きているわけです。60 歳を過ぎて、普段ほとんど口数のない父が、ぼそっと私に語ったことがあります。「父さんは、今でもあの時に死んでおけばよかったと思っている」と。若かった当時、脚気を患って徴兵検査に通らなかったことは以前から知っていました。しかし、戦後会社員として地道に働き、結婚し、三人の子どもを育て、無事に定年を過ぎた今でもそのように思っていることに、私はびっくりしました。「それじゃあ戦後のおやじの人生は、いったいなんだったの？俺たちは、あなたにとってなんだったの？」と語気を強めて問い返してしまいました。たしかに、自分の周りがみんな出征し、自分だけが取り残されたような思いの中で戦後を迎えたのかもしれません。だからこそでしょうか、父親にとっての「戦争」は、整理されないままで引きずられ続けてきていたのでした。そんな父の言葉を思い返してみると、ドイツのように歴史の負の部分をしっかり総括することを、私たちはできずに来てしまったのではないのではないか。それは、家族・個人のレベルにおいてもです。
　そんなことを思い出しながらドイツを回っていると、今の世界や日本の状況が本当に心配になってきました。
　世界は明らかに右傾化し、自国の利益中心の駆け引きが「政治」の課題となっています。戦争によって、世界の多くの場所で毎日多くの人が死んでいます。ガザでの死者は現在 65000 人を数え、その３割が子どもたちだと聞きます。「平和は武力で守るもの」といった詭弁がますます大手を振るい、兵器や武器がどんどん生産されていくのです。しかも、世界的な貧富の差がますます広がりつつあり、その日の食事も手に入らない人々が多くいるなかで、です。
　こうした世界状況の中、日本でも今まで考えられなかったようなことがおこりつつあります。それは、被害の歴史さえ消してしまおうとする動きです。
　ポーランドは被害の歴史をしっかりと残し、ドイツは加害の歴史も直視していることを述べてきましたが、残念ながら日本は「加害の歴史」を反省の上にしっかりと整理してきたとは言えません。先ほど触れた戦後補償の問題もあり、加害の歴史を記すような遺跡などはないに等しいです。それどころか、「南京大虐殺はでっちあげだ」と公言する人もいます。こうした流れの中で、数少ない被害の歴史さえも認めない動きも出てきました。最近では「ひめゆり学徒」について、「ひめゆり平和記念資料館」の展示に関して疑義を表明し、集団自決などの悲惨な境遇におかれてしまったことを否定するかのような発言が、国会議員からありました。振り返れば、安倍元首相は 2013 年４月、国会で「侵略の定義は、学界的にも国際的にも定まっていない」と発言しており、その年の暮れに「首相として参拝」と位置づけて、靖国神社に出向いています。そこには、「日本は侵略ではなく、弱い国を支え、開放するために出兵した」との歴史観があります。
　今日本は、本当にどこに向かっているのでしょうか。私たちが戦争に関する「総括」を正面から行わず、ちょっと横に置いてきたつけが回り始めているのかもしれません。
　しかしそうしたなか、嬉しいニュースも入ってきました。大和市で長く教職にいた津田憲一先生が、奄美諸島での集団自決を何年にもわたって追い続け、古老たちの証言を基にした報告が出版され、大きな反響を呼んでいることです。長年にわたって足を運び、当事者たちから話を聞き取る姿勢には、本当に頭が下がる思いです。「人の声を人の声としてしっかり受け取る姿勢」は、平和を考え続けなければならない私たちにも、必要なことなのではないでしょうか。
　ますます遠くなりつつある平和・・・Ed.ベンチャーとしてこれからも考え続けていきたいと思います。

これからのEd.ベンチャーの学習会

理論学習会　●10月25日(土)13:45～15:45@大和市シリウス606
　テーマ：今後の教育を展望していくために教員集団はどうあるべきか

授業研究会　●10月25日(土)16:15～18:15@大和市シリウス606
　講演：生活綴方は資本主義にどう向き合ったのか
　講師：桑嶋晋平氏(日本女子大学　准教授)

外国人の子ども理解のための学習会　事例研究会@zoom
　●10月16日(木)19:00～21:00
　●11月22日(土)13:30～15:30

インクルーシブな社会を目指す学習会
　●12月14日(日)13:40～16:30@大和市ポラリスroom3
　講演：授業デザインからインクルーシブを考える：デジタルシチズンシップの取り組み
　講師：草原和博氏(広島大学　教授)

◆理事のひとこと◆　体験格差ということが言われている。子どもの家庭状況により、子どもが出会う体験・経験に、格差が生じてしまうというものだ。それは子どもの将来にまで影響を及ぼす。子どもには、多くの人に出会い、豊かな体験をして欲しい。そのために私たちには何ができるのか考えたい。(KM)